

系碕神社新報

第 241 号

令和 8 年 3 月 10 日

系碕神社 三原市系崎 8-10-1 Tel 0848-68-0102

発行 系碕神社事務局
責任編集 宮司 松本 圭

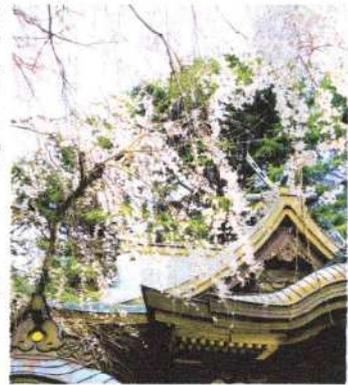
桜のお話

令和八年も春を迎え、先日、気象庁が桜(ソメイヨシノ)の開花予想を発表しました。広島県は三月二十二日とのことで、あと半月足らずとなりました。あと少しで、日本国中に桜の花が咲き乱れる時期を迎えます。それに因んで、今回は桜の話を書きます。

○諸々の品種について

桜は、ネパールなどのヒマラヤ地方に分布するヒマラヤザクラが原種とされており、二万五千年前のヒマラヤザクラの化石が見つかっているそうです。それがアジアに広がって行く過程で様々な品種が派生しましたが、日本に自生している野生種は、ヤマザクラ、オオシマザクラ、エドヒガンなど十種なのだそうです。因みに、ヤマザクラやオオシマザクラは日本の固有種で、エドヒガンは韓国の済州島にも自生しているとのこと。シダレザクラ、他の桜より早く咲くカワヅザクラ、そして、日本の代表的な品種であるソメイヨシノなどは、人の手によって栽培されている中で自然交雑や人為的な交配で生まれた栽培種です。厳密なところは分かりませんが、桜

の栽培種は数百種類もあるのだそうです。



○そもそも「サクラ」とは？

「サクラ」という名称の起源についての代表的な説は以下の三つです。

①「咲く」に複数を表す接尾語の「ら」を添えて「サクラ」となった、という説。

②日本神話に登場する美女神、「木花開耶姫命」の御名の「サクヤ」が転訛して「サクラ」となったという説。

③「サ」は稲の作神のことを表す。太古の人々は、桜は「サ」の神が寄り憑く神座、即ち「クラ」であると考えていたので、「サ+クラ」↓「サクラ」と呼ばれるようになった、という説。

①は単純明快で説明不要と思うので、②③について、以下に少し補足します。

○木花開耶姫命

まずは木花開耶姫命についての神話の一部を書き出します。

「天孫降臨」で地上界に降りた瓊瓊藝命は、木花開耶姫命という大層美しい女神様と出会い、彼女に求婚しました。木花開耶姫命には、容姿の面で妹に劣る磐長姫命という姉

がいたのですが、姉妹の父である大山津見神は、姉妹を二人とも瓊瓊藝命に嫁がせようと考えました。しかし、瓊瓊藝命は木花開耶姫命だけを娶ったので、大山津見神はこれに怒り、瓊瓊藝命に告げました。「磐長姫命をも妻とすれば瓊瓊藝命の命は永遠のものとなったであろうに、木花開耶姫命のみを娶ったので、木の花が咲き誇るようこそ榮するだろうが、その命は儂いものとなるだろう。」

木花開耶姫命の御名の「木花」は、桜のことを指すと解釈されています。大山津見神の予言は、美しく咲き誇って儂く散っていく桜の花を想起させるので、木花開耶姫命は桜を象徴する女神様と捉えられています。

○「サ」と稲作

田植えを行う旧暦五月は「サツキ」、稲の苗を早苗(サナエ)、

田植えを行う女性を早乙女(サオトメ)と呼ぶように、稲作に関わるものの呼び名に「サ」がつく場合が少なくないので、「サ」は稲、もしくは稲の神霊を表していたと考えられます。

昔の人々は、稲の神様は農閑期には田から山へと帰って行くと考えていました。苗作りや田起こしといった稲作の準備が始まる前、サの神がまだ山にいる時期に山に分け入ってみると、白い花をいっぱい咲かせた桜の木を見ることが出来ます。そして花が散った頃、人々は、桜の木に宿っていた「サ」の神様が田んぼへと下りて来られたなと感じる中で、稲作の準備を始めます。このように、桜と稲作を関連づけて考えることが出来るので、「サ」の神の御神座であるから「サクラ」と呼ばれるようになった、というのが、③の説です。

○花見の宴

今や、咲き誇る桜の下で宴会を開いたり散歩したりするのが花見という行事の定番ですが、梅の花を見て楽しみ、歌を詠む貴族の行事が、花見の起源とされています。「令和」という元号

田植えを行う旧暦五月は「サツキ」、稲の苗を早苗(サナエ)、

・世の中は「白」か「黒」だけじゃない。その間の「グレー」が一番広いんやで。

一向宗専念寺住職「ネコ坊主」様。

※「世の中なかなか割り切れない。無理に割り切ろうとしないこと」という意味でしょうか。実際、単純で一面的な価値判断で物事を進めようとしても、無理が来るのが世の常です。

・私は大谷さんになれないが、大谷さんも私にはなれない。

浄土真宗永明寺の掲示板より。※「各々がそれぞれの花を咲かせよ」ということでしょうかね。

が、奈良時代の和歌集「万葉集」の「梅花の歌三十二首」の前文に由来していることをご存じの方も多いでしょう。

平安時代になると、貴族たちが花見の宴を開いて歌に詠む対象は、桜に移り変わっていき、和歌の世界では、単に「花」と言えば桜の花を指すようにさえなりました。平安貴族たちが愛でたのは、野生種のヤマザクラでした。古今和歌集(905)には、現代の日本人の心をもグツと掴むような桜を読んだ歌が、いくつも収録されていることは、皆様ご存じのとおりです。

桜に寄せる日本人の思い、すなわち、無常なもの、一瞬煌めいて滅んで行くものを愛おしく思う美意識は、平安の昔はおろか、木花開耶姫命の神話の時代から受け継がれているから、現代人にも桜が「心に刺さる」のでしょう。

話がすこし脱線しました。時は流れて江戸時代の中頃、江戸幕府の八代将軍吉宗は、享保の改革によって人々に質素儉約を課しましたが、その一方で、人々に娯楽を提供して慰撫する目的で、江戸郊外の上野、品川、小金井などに桜を植えて花見のスポットを造らせ

ました。このことが、庶民の娯楽としての花見が定着するきっかけとなりました。地方では、ずっと昔から、稲の神様を田んぼに迎えるとともに作柄を占うための、神事として花見が行われていましたが、やがて、娯楽としての花見に合流していききました。

明治以降、廃城によって公園となった各地の城跡をはじめ、それこそ日本中のあちこちに、江戸時代後期に江戸の染井村で生まれたソメイヨシノが植えられました。こうしてソメイヨシノは、花見の名所を日本中に形作ると同時に日本の桜の代表格となりました。

令和八年疫神祭

二月二十八日(土)の午後五時から、恒例の疫神祭を齎行致しました。今年で四百一年目となります。神社門前の海岸にとんどを立てて点火し、今年の恵方の南南東にとんどを倒して、古神札・縁起物などのお焚き上げを行いました。この祭は、とんどに塞ノ神(普段は集落の境界に居て



て集落を守る神様)をお招きして、お焚き上げの忌火の力を借りて疫病神を退散せしめ給うたために行われる祭りで。

毎年この神事を行う海岸の埋立地は、つい数年前までは広い空き地だったのですが、次第に工場などの施設が増えてきました。それに応じて、年々、防火のための対策を強めてきました。また、祭りに毎年参加して下さる人の数が減ってきたので、自然に、「一回初めて参加」という方の割合が大きくなって来ます。新しく参加される方がいるのは喜ばしいことですが、その一方、昔のように細かく指示をしながらも安全かつ円滑に事が運ぶような、いわゆる「阿吽の呼吸」という訳にはいかない場面が出てきます。安全性向上、事故対策に終わりは来ないようです。

その他「奉仕等

○神明だるま供養祭

二月二十日(金)午前十一時から、道の駅 みはら神明の里 にて齎行致され、人々を見守り、願いを叶えて下さった古いダルマさんたちに感謝の念を込めて、供養致しました。

道の駅みはら神明での供養祭は、令和三年(2021)にコロナ禍で神明市が中止となって古いだるまさんをお納めする所がな

くなつてしまったのを機に、毎年齎行されるようになりました。今後も続ける予定とのことです。

ありがとうございます

昨年の夏越大祓(六月三十日)に始まって先日の疫神祭に至るまで、種々の祭りや行事の準備・運営・後片付けが、実に慌ただしく行われてきました。ご協力下さいました総代会・有志の皆様へ深く感謝致します。ありがとうございました。糸碓神社の祭りに関わる諸々の作業は、次の夏越し大祓の準備まで、しばらくお休みになります。

予定

○天神社役員会

三月二十九日(日) 午後一時半より。糸碓神社社務所にて

○天神社総代会

四月五日(日) 午後二時〜糸碓神社参集殿にて

○天神社大祭準備

四月二十五日(土) 午前九時〜御社殿の装飾などを行います。

○天神社大祭

四月二十六日(日) 午前九時半〜 大祭神事 午前十時半〜 ビンゴゲーム

以上 糸碓神社宮司 松本圭